特別
ヘ 4
6616

詞華和歌集巻第一

春

堀河院に百首哥たてまつりけるに春立心をよめる　大蔵卿匡房

こほりゐし志賀のからさきうちとけてさゝ浪よする春風そふく

寛和二年内裏哥合によめる　藤原惟成

きのふかもあられふりしはしからきのと山の霞春めきにけり

天徳四年内裏哥合によめる　平兼盛

古里は春めきにけりみよしのゝみかきか原をかすみこめたり

はしめて鶯のこゑをきゝてよめる　道命法師

なおさくらまちえぬ鶯のこゑをあやな人やきくらん

題不知　曽祢好忠

雪きえはゑくのわかなもつむへきに春さへはれぬみ山への里

冷泉院東宮と申けるとき百首歌よみてたてまつりける　源重之

かすかのゝあさなくきしのはおとは雪のきえまにわかなつめとや

斎明親七十賀の屏風に子日したるところをよめる　赤染衛門

よろつ世のためしにきみかひかるれは子日の松もうらやみやせん

梅花遠薫といふことを

一 吹くれば花なるみ梅もちるなれば春風をかし　源時保

梅もとをあり　右兵衛督公行

五 梅のもるあしをたのもうへてあるとのかげさそふ

飯尾信

三 風こもるそこつのみるる海つはつるあこまもなれやする

雲不知

四 春つかたくへなるらの春こまいるもみやたるひとうん

花の盛の夜

左原盛信

四 とえわるる春のみしをとのさ原こまの春をも春めきは行

傳都覚雅

天德四年内裏歌合に都をよめる

六 さとをしめのいとうめかくる青柳を御をとをなをすをそ山也

平兼盛

賜左大臣の歌合によめる

いとなの風ふくこそ風よもしをゆんあしやさの原

源季遠

故御柳をよめる

ゆ御のみるくのやるくとたのそのけ山あさ緑そも

源道淵

紀不知

みやまきのそのこそ春もみさわしさくこもよあれ

源頼政

京極前大政大臣の歌合に

康資王母

それなしのやまさくらはにほひとみよ白雲とみてやすきにし

このうたは判者大納言経信のさくらとしゝ詩

てかきしも歌よみとはみえねなんとなきかと

けれともあしからの康資王母のよみいひつく

しけり

京極太政大臣 師実

白雲とならてこゑすれはなしのうらをむさくらつもる

ぬし

康資王母

しらくもとたなひきてくれなしのひとつやまに

おなしく歌合によめる 一宮紀伊

朝またきみなとこめてそ山さくらたつ白雲のあとなかりけり

大蔵卿匡房

白雲とみゆるにしるしみよしのゝよしのの山の花さかりかも

承暦二年内裏後番の歌合によめる

大納言公実

山さくら咲ぬるときはつねよりもみねの白雲たちまさりけり

遠山桜といふことをよめる

前斎院出雲

九重にたつ白雲とみえつるはおほうち山のさくらなりけり

題不知

永秀法師

よろこひにいかにかすみそ心から雲のよそにみゆるさくらかな

白川に花見にまかりてよめる

白川の花のこゝろをみるにはたゞ白なる雪しの花を見ぬるかとぞおもはれける

源俊頼朝臣

白河院御製

ゆきかゝるこゝろをつくさぬるかなつゆ

精進偶相応の伏見の山庄にて水を桜と

よめるを

源師賢朝臣

世のなかのみなかなかなるこゝろかな

一條院御時なりの花の人のをりてうゑ

ゆけるとのゝ行のよりはるかに花の

なりてうゑるものゝかはをられぬるかな

仲摂大納言

新院の御時九つのよのなかのなかの

よめる

右近中将教長

古のよしの人のうゑをきてこゝろ

人をあはれとおもふてさくらの花をてこゝろ

うゑをきてある

源資平

さくらの花てこゝろに初めて咲をいとのゆくへや人のみるし

肥前

基ゆきにみるの花のかゝとしてはるかにこゝろ

内侍

贈左大臣母

ゆきとのみまかふさくらの花なれはしつえもさくらえたもなくゆくかなか

源忠季

わかやとのさくらはなやちりぬらんものさかりはうつりゆくかな

さくら花のちるをみてよめる

藤原元真

さくらちらさてよをへてしあらは心しつかにもあかましや

天徳四年内裏歌合によめる

大中臣能宣朝臣

さくらちるにはのおもしろさはなかなかにはらはしとおもふこゝろあれ

太皇太后宮の菊合のついてにたきものとらせ給けるとき

人にかはりてよみはへりけるはかりに硯の

ふたに雪を入てまゐらせけるうへにかきつけて侍りける

檜律

さくらちるにはをとめてはきもえせぬ雪やなるらん

まてみあらしてゆけの庭まちこそむへしまつ

ちかつけわかてゆけるをとみてよめる

源俊頼朝臣

ちる花もなほしたつの庭のおもはむらしこそみなつかれ

橘俊綱朝臣の伏見の山庄にて水辺落花

といふことをよめる

源師賢朝臣

さくらさく木のしたかはあさなけにちりてもものの淵にこそあれ

藤原範永朝臣の家にて老人惜花といふ

ことをとなる

菅原範永朝臣

ちぐもとあるはなみとやいはんそのうきあわらるまてれいしん

遊乃さくらのちるをゆらんてうもそ

まいるる　　もゆ山花別

わうやのさくなはちるすいしんようそうそうはるを

さくらはちるのちるをみてうる

源俊頼朝臣

みるのうてれしよりまちもなくいまやれもすきわうる

前中納言とし

遊とをよりるうをみるなるかあるをもうさ山

もゆ　有仁

大中臣能宣朝臣

ちぐもよせさけのちぐ山川のなをもちくてなるちくるみ

寛和二年内裏歌合よりの

菅原長能

ひとへたよあのあるをいとくやはくまれるまきもも

麗京房女院の歌合よりの

みひとあ

やとけうしたをなりまきのちいひとあるにれかて

堀川院百首歌たてまつりよりの

太皇太后宮肥後

こぬ人をまちもの山のあをとはそ

新院位ニ御ましまし時杜鵑とうせなましけ
るを
関白太政大臣

たゝのもりのうまてゝ郭公
なのをしてこゑのまてゝ
老人備長とゝ
ふことをまつ

橘俊成

和してこゑ去の初とゝいまさけまとゝるひとあり月なか
三月晦日
のくれのるゝとゝもをなまくをめしてゝ去
ものゝこゝもをなまくをめしてゝ去
あらけ
れしをてゝこゝしるけるよまた

新院御製

ゝ去の名あやのゝ春のゝ

詞花和歌集卷第二

夏

卯月一日のまつり　増基法師

ふるもあるのゝなかなひとゝ
ふるもしたつあるゝらゝ

俊恵

郭公

宮のゝとゝあをみてゝけうゝ
霜月長官ゝて
のつゝてゝけゝ
けきゝ

大蔵卿長房

ゝをゝゝゝゝあひゝかゝ
神ゝをゝ

源道具

さのさくらなつの山ぢやをこえしゆきけてのこ雨つゝみすみ
なかしきくをまちやしはあき

周防内侍

むかしにもあらぬかのみ都はきをまつ心こそかはらざりけれ
関白前太政大臣師実 都の歌とのへ
十そぢよりまでは何よなし

菅原忠道

都は鳴子ならしては在月に見えぬなきくもの見ゆ
読人不知

花山院御製

としなきまつ都に宮を都にをもふはふきて物きにせよ
山ちかきそて吹けるも都のあきしくらさふ

宮しはあり 右衛門佐
山さとのひとこそかけまし都にみやこの今かつやまつらん
読人不知

能因法師

山ひとこのふもとやまの都にひとこそなかけにふりつゝさえさく
承暦二年内裏歌合

菅原伸

都にあつまけてなかめまちさめの人今やきかん
読人しらず

大納言公教

まつよはいかにしなきにを都になかねはまたのころぞ
関中都とはいなさしをさしれ

源俊頼朝臣

なかきいつもなきまさりいとゞ袖ぬらしけむあやめのたび人かな

題不知　　待賢門院堀河

こやの池におふるあやめのながきねはひくしらいとのこゝちこそすれ

太政大臣の家にて歌合し侍りけるに
よめる

源頼政朝臣

まきのとをたゝく水鶏はあまのとのあけてのちこそとざさざりけれ

たいしらず

皇嘉門院尾張

五月雨の日をふるまゝにもの川やそせのわたりこそ絶えまなりけれ

堀河院御時百首たてまつりける

大蔵卿匡房

つのくにのこやのとのやの五月雨にいりて雨もる夜ひさしの気

右大臣家の歌合によめる

源忠季

五月雨はなにはほり江のみをつくしみえぬや水のまさるなるらむ

郁芳門院の菖蒲の根合によめる

中納言通俊

ちよやくも海のあやめをひきそへん五月雨のね

若宮通宗朝臣歌合し侍りけるによめる

良暹法師

さ月やみあやめもわかぬ風はたちさへまてつあふひけん

やをとこもたまひて[illegible]橋をもかんて

たまゝたまひなく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

贈左大臣の御法歌会し侍りける

俊盛大夫頭重

[illegible]

寛和二年内裏歌合よみ侍

大貳三位

[illegible]

二条左大臣の御法歌会し侍りける

[illegible]

[illegible]

五月やみ行川のほとりにまかりあひて

小倉山麓にて人々

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長保五年入道太政大臣の御法会し

侍りける時

[illegible]

[illegible]

[illegible]

何と[illegible]

同六月七日ばかり大中臣[illegible]太皇太后宮大弐

ね[illegible]七夕のあふ[illegible]まちわぶるかな

題不知　相模

下もみぢ一葉づゝちるこのしたにあきとおぼゆるせみのこゑかな

曾祢好忠

むしのねもまだうちとけぬくさむらにあきをかねてもむすぶつゆかな

詞花和歌集巻第三

秋

題不知　曾祢好忠

山城のとはたのおもをみわたせはほのかにけさそあきかせはふく

摂津守にまかりける比大江為基任はてゝのほり侍りけるに

つかはしける

きみすまはとはましものをつのくにのいくたのもりのあきのはつかせ

僧都清胤

七月七日式部大輔資業かもとにてよめる

橘元任

荻の[illegible]

ゆるし給へとせさせたまひての七月七日にまゐらせ給けり

白河院御製

七夕にこゝろをかけてことしよりゆしと宮みなをみそめぬるかな

承暦二年内裏歌合によめる

藤原顕綱朝臣

たなはたのこゝろをかはすと秋かせにくれゆく空のうらみかなしむ

題不知

加賀左衛門

いかなれはとしをへてあひみる七月あふせまれなるかさゝきの橋

新院の御前にて百首歌よませ給ひけるによめる

左京大夫顕輔

天川とゝけぬ雲やたなはたのよにはよのかたりなる覧

寛和二年内裏歌合によめる

大中臣能宣朝臣

おほつかなかくやはしらしあまの川いつとひわたるせかれ

七夕によめる

修理大夫顕季

あまの河たまりしとをきかそふなるあさせかたくもあふよしのみか

橘俊綱朝臣の伏見の山荘にて七夕祭の心をよめる

良暹法師

年をへてたなはたのほしのまつあふせのまれなるをまつ

藤原顕綱朝臣

たなはたのまつほとひさしきあまのかはせのわたりをいつかまされつ

題不知

祝部成仲

あまの河ふねの水さを雲ぢにてはやけさいもうらん

三条太政大臣の家にて月を見て雲上月

源順

水さをみやゝれはあきの月まてはるをまちとる

雅通公

右大臣

いつなれはかたらぬ月のなかめもことにてわまうら

紀有知

ふるけれ今しはけしきかな

さ衆つ僧都成

雲なかの月やあかくも雲のそこ月もてはまうら

月をかたらんしてはまたまたけり

三条院内裏

あきはぎあるしにのりをとゝのへ月をとらんと

紀有知

天台座主明快

あはれあるしなるはなのあるよの

関白前太政大臣の家にてよめる

大江原重基

雲のそこにのこるのこゝろ山のはにかけもさはけるかな

比叡山の念仏にのぞみて月をみてよめる

良暹法師

あるゝ雲ふきはらはなまてみつゝ雲のそこの月

京極前太政大臣の家にて念仏にあり

源頼俊朝臣

姥のよびつぎはゝのはそなのきしのあるとまつとしるとおもし
関白前太政大臣の家にて十五夜の心を
よめる　　藤原朝隆朝臣
ひさしまてしけさなりて相坂の関ちかこそ思ひなれ
と思ひ侍りて寄月恋しのけるにあり
隆信朝臣
姥のよのあるとるのつきとみてときはとなのきはるかるる
月をまつ心ぞ　　大江嘉言
あきのよの月まちいてゝやまとこゆん
月待山水といふことをよめる　　藤原忠通
姥山の忘水ハくもゐなるハやとれるつきのこゝろもとをる
寛和二年内裏歌合にうまそなましくらる　　紀山忠行朝臣
あきのよのつきはこゝろのあくがれ雲のゆくへをたゝるる
そらしらも　　源兼澄
ひさかのそなのおきのこゝろ風こそわれ姥の袖
おきのこゝろや姥の袖　　大江嘉言
姥てふるこのそなしくみりよ忘ハうゝあれかすこ
和泉式部
賞花好月

みちのくにに山きこえて松にそなれぬる

藤原顕綱朝臣

蔦のくれなゐつきしたてる木陰の露をたもつ

源道昌

ちりにこそとみそなるあしのもとに陰

は輪にまつてけりにてこのもおもしろさ

てゆくもの

赤染衛門

姫のもみぢのもとはゆくとやいそぐらむ

つるのいつきとさしけるきぬのそつき

よあきうのもさきてゆけるとあり

後子内親王　号六条斎院

神無月ばかりなるに人あまたまうでたるに

堀川院御時百首奉りてまうでけるに

隆源朝臣

月のかたきに人なるやうにまつ野よりはやしたる

白河院御歌にて義命せさせたまひし

よもあり

周防内侍

あきかぜになびくすゝきのうへをとてみる

敦博王

おきのとにとゝ人なるやうにあるとてそよとも

紀不知

雪詠好忠

姫のもとにしてとゝ人なるやうにしのなるゆの

やうにそ見ゆるとこもにしりのはしらくそこ

和泉守

みちのくに任じて下向の時の尾張あれ

なるみのゝ終生のなきしるけるとあり

橘の仲相

右さゝにかくさわけの終生のなるみのつのまたのあり

天禄三年四月廿日にあり

橘正通

始めは安芸守なるもの

弱冠にあり

大蔵丞屋房

年をへて九月のなかの月のこまとゝいてゝ

永祚元年一条の帝御代にあり

出羽介

さく人のなかやもそうゝ思ふのつまをこそひてなくらめ

既不知

藤原仲正

始めは左兵衛尉なりしかのころ

九月十三夜の月思ひ出ることもなし

佐渡守

初代の別当

始めは左兵衛尉なりしかのころ

関白前太政大臣の家にまゐりてあり

原雅光

宮かのうりのとみをいかにとなりけるもし

題不知　　　　道命法師

こゝろみさくらつきものゝあはれこそうつろひにめのかなしさめ

曽祢好忠

そのはらの冬まてみよと残る風をさきてのこせるもみちは

宇治前太政大臣白河にて見行客といふことを

よめる

堀河右大臣

関こゆる人にとはゝやみちのくのあたちのまゆみもみちしぬやと

武蔵国よりのほり侍けるに参河国の二村山

のもみちをみて読る

橘能元

いくらともみえぬもみちのにしきかなたれ二むらの山といひけん

寛治元年太皇太后宮の哥合によめる

大蔵卿匡房

千ゝわかなのまのいそのしもみちはてゝ山は今もとこえ

題不知　　　　曽祢好忠

山さとはゆきかふ人もみえぬまて松の木のはもちりにけるかな

まかりて法輪にまうて侍けるに大井川にても

みちのちりけるをみてよめる

道命法師

錦田のあやおりかけし水のおもはもみちの帰とそしく

局はもみちはいてしをとこよめる

源俊頼朝臣

[illegible]

つきのあきはなをみちのくるをみてよめる

平兼國

あれにてつきはこそまつわかやどにはなのをりをぞ見る

一条摂政御集

くもりなくすみのぼるかな

菅原惟成

[illegible]

初恋をよめる　大中臣能宣朝臣

[illegible]

寛和元年九月晦日[illegible]

前大納言公任

いつるよりはのゆくへわかるるをとまりもとすしらるわびぬまもなし

詞花和歌集巻第四　冬

雪　　作者不知

なすのもりてゝのこんとおもひしを雨まなすのもりの
ひとしまのゝ浦のちゝ冬ゝれはひとゝとをあつまれる

　　四条宰相　俊成

雪のうちの冬をとゝのへけるを

大貳資通

こゝもへてあるとはしかとみちのくのあさかの
　　作者不知

花恋門院御成

冬のよのしも何毎のみちのくのあさかの

大江嘉言

山ふかみおちてつもれるもみちのかをけうの何毎のあさ
　　落葉埋水といへることをよめる

惟宗隆教　後三後年姓未詳

つまさしのもみちをたにのしたにして木ゝのしたに響そゝ
　　落葉有聲といへることをよめる

風吹てなるゝしるしのもみちはいとゝあるもてゝいつちゆくらん

　　作者不知

かゝるゝとのもとのもみちは何毎の冬をとゝのへ

　　曾禰好忠

地ハなるとまれとかゝしなもくかれ何毎の冬をとゝのへ

　　作者不知

冬山の百寺おろみ何毎のしをれもあ

もろともに山めくりする時雨かなふるにかひなき身とはしらすや　左京大夫道雅

旅宿時雨といふことをよめる

瞻西法師

いはかさとてなくなれはなほたかつらの月みるとみし時雨ぬる

天暦の御時の屏風に網代よみ侍りける
たなかみのはし所をよめる

平兼盛

み山にはあらしやいたく吹ぬらん網代もたはにもみちつもれり（しきれり）

鷹狩をよめる　藤原長能

あられふるかたのゝみのゝかりころもぬれぬやとかす人しなけれは

堀河院の時百首歌たてまつりけるに（よめる）

大蔵卿匡房

山ゝみやくもをみかはしきかほこそやそて雪けの雲となりけれ

大和なるにてかけりしとき入道前太政大臣の許
まてこつ雪をよみて

藤原義忠朝臣

よしのてふの山にみなれぬめつらしきけさはふる雪

題不知　大江嘉言

ひくらしに山ちの昨日しくれしはふしのたかねの雪にそありける

大蔵卿匡房

たく山のいくかはみちもちらねとてくちてつもれる雪そふりける

初花は春はすぎまし雪の雲とみし
ほどもなくまうけまうけまうけまうけ

関白前太政大臣

れなみにみてしこそへも雪ふれし白きうぶのかの
和歌

知

美人のつまもとうふるもんぬまうくれもしぬのいきるみ

嚴雪の思ふまうく

成尋法師

かつなるのみまきへうれてもうるしたいこうたる

たまぬうくうれとるまぬ成るたれたるやみもあるとうん

宮内卿

詞花和歌集巻第五 賀

賀

一條院上東門院に行幸をせたまひけるに

入道前太政大臣

きみのためにまつまつ川のそこにすみなるもとへつるもんれ

二月一日子うみるうんしつうとうとうれ

伊勢大輔

うくくまるこのこの世にしかるとかのつきる

一条左大臣の陸奥に行幸のうかがたうれ

大中臣能宣朝臣

きいいうなるをいかてつうとうれの世にかうこの行幸の

長元八年宇佐前太政大臣所哥合

雜同詠

みやこ人雲かゝるとも見てしかな海なるまそ

赤染衛門

さゝなみにとまるわもちてゆく舟のうらもしらぬ

こゝろ地

宇佐太政大臣の哥の屏風のうちにみて

ゆく人かきたるまつ

中納言

あるそのみつとしてこゝろもとまらぬ

あ〻人のるこゝろ人よりうしてをるあけくれの

いひつゝはけり

和泉のいそもしまのあまのあらてよりつゝみてをるを

正乙門院の御屏風に十二月晦日のうかたに

かゝるを

清原元輔

一とせ[と]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]なるあはつかの世のまとまり

河原院に人〻まうてゝ哥合しけるに松除世

ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]

前大僧正公任

惠芳法師

なまよりの池のこゝろ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]

後三条院行幸まうてゝふるを

よみひとしらず

さかりなるこのかみのもとにて
後鳥羽院御歌
ちはやぶる神もうけぬ行くすえは
たれかたのみのしめをかけまし
天納言信信
ひさしくもなれるこのかみのもとにて
京にて太政大臣の哥合に
大蔵卿匡房
さくらみてかへるみちにもあらぬかな
こころをとどめしはなのしたかぜ
天喜四年九月晦日后宮の哥合に
はるかぜ
はるのくれ
なつのこまもまちこしてもとなるもとつせをみゆる見わたす
後冷泉院御製

詞花和歌集巻第六
別

春謝廣業たてまつりて後の作らるまてに
よしひつりけるに　民部内侍
みやこをはつるかをなるたひのをとはなる
道さたにしられて後みちのくにまてにけり
つりけり
和泉式部
ちはやふるかみのせをもきくるかな
七条大納言頭弁加賀にまてにつかはしける
つりけり
源俊頼朝臣
ちはやふるかみのせをもきくるかな

橘則光朝臣みちのくになりてまかり侍けるに
餞し侍るとてよめる

藤原輔尹朝臣

こまのゝてまつけみこそおもひしあかれなれ人のなかゝは
わしけつゝ母の命あるかたゝうけるまにまかけ
るふいひつかりけり　藤原為信
かわこひしなとをしゆるをそのまいよむなのきのわかれ路
大弐資信太宰帥にてくたりける河尻にて
まかりあひてよめる　律師円基
六とせをまちみゝはまさしけりしも松つまみこそはて花のちる
つねにゆけるめくりの日のなかにくたりけるに餞

給とてよみて給ける　一条院皇后宮
あかさるを日にもむかひてもおもひやる宮古にこれのなのあかさんは
帝子に給けるわかれわかるゝてひの国へま
かりけるにさうそくつかはすとて

清範有禅

わかれ路の恋をそかけむたひ衣すそのゝつゆにぬれてゆくとも
月ころ人のもとにやとりて侍けるにかへりけるひあかし
て侍りける　玄範法師
又こひしさをねむもえこそいひよらね心よかよふいのちなりけむ
もろともにゆけるを人のいさめて侍けれは
よめる　寂照法師

[illegible]

人の[illegible]

[illegible]

[illegible]

詞花和歌集巻第七　恋上

恋の歌とてよみ侍ける

関白前太政大臣

あやしとも思ひ分ぬ山桜ゆゑ見ぬ人まで引てとはゝや

花不知

菅原寛方朝臣

いそのかみ古きあれにも咲つゝしもとはまし人なくて

隆恵法師

くるしかりしいそぢ過ぬ思ひかな

堀河院御時百首歌

大蔵卿匡房

なにしおはゞあふてうらもみまほしきあはぬ人のこゝろ

花不知

平兼盛

なにはがたみをつくしあはぬ水の面のみわたるかな

一条院御製

ちはやぶる神のいがきをこえてもあふてしるしの杉の

康和四年内裏歌合

源俊頼朝臣

ちはやぶる神のみをなるつまなれば人目をもとはぬ

新院位におはしましける時

ちはやぶる神のいがきこえもとれ葛

福光寺

ちはやぶる神のいがきこえもとれ葛

けるよりあり

なるさしてかもなるてやうこみなりしかるもなるてやうこみなりしかるもなるてやうこみなりしかる

[illegible]

能因法師

[illegible]

前大納言公任

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冷泉院[illegible]

けるよしを

[illegible]

源重之

[illegible]

[illegible]

晩川院[illegible]

晩理大史顕季

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平祐挙

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中納言俊忠卿の歌合のうち

春

春のきぬ　菅原顕綱朝臣

春のきぬ　源道綱

この春はなにをたづねて　源雅光

春の日の　藤原定頼

春の夜の　大江匡房

春の夜の　藤原公任

春の夜の　藤原道信朝臣

春の夜の　円覚法師

春の夜の　大中臣能宣朝臣

春の夜の　藤原実方

わすれぬるみなれぬるまつけぬるあるさ
山ゐにまかりてしらぬかのもとにひつ
りけり　藤原範永朝臣

こゆるぎてをとはせのもとの宮のなかいなるいはもと
関白前太政大臣の御ものあり

藤原親隆朝臣

ゆきかけてをりをりなるしらなみのこゝろまかせ
れぬ　不知

新院御製

やとるこゝろみるまもうたきかはのわまてもとつよあしをな
るまなるこゝろあるこゝろ　宮内卿

當祝好忠

冬のひるれはあるそんしらはなよりもあるて
いつりけり　道命法師

思ひもなくこゝろのはるしるのはるのこゝろなるはあるもなる
　　好忠

ゆ年冬しのはけるよあり

中納言俊忠

こゝろひてゆりあるもあるなるみあるとるあるの

詞花和歌集巻第八

五下

戀ハ

人しれずこそいひしかど女のもとにまかりてと
くまかりいでにけるあくるあさいひつかはしてあく
るまでまちけれどこのかへりごとはせざりけり

藤原相如

さみだれのそらにうかれてゆくへもしらぬ
我恋

藤原道信

わすれぬるあはれとなれば
女のもとにまかりあるきはじめてのちまかりこ
ずなりにけるをいかがとおもひけんとて京大夫頼任のもとより奇合しにつかはしける

藤原頼房朝臣

つれなくてこそはかりそめにあるまじきものなれ
女のもとにまかりかよひけるをのちまかりこずなりにけ
るをいかがとおもひけんとて奇合しにつかはしける

藤原實方朝臣

なにしかはかりそめにあるまじきものなれ
なにしかはかりそめにあるまじきものなれ
みな人のたしかしなれば
とて奇合しにつかはしける

藤原成範

[illegible]のあさことのわすれがたくなりてあるを

茂原保昌相居をすてて丹波へまかりける

のしてはいひけるかこのもとにひつりけり

和泉式部

わすれみやこにとゝまれあらきの人をとゝめ

はいひけるこの木のもとにひつりけり

大江為基

なをとなりて色つかぬ身につるをうつるを

はかれをとゝまりけり男の姿ちけるを

しもまうてこれあるをひつりけり

一宮紀伊

[illegible]

坂上明基

せをはしり君をはなれとよのつかをのこゝろけ

北不知

あとをまつらしあるをいかもれわれとひとまる

[illegible]

[illegible]

右大臣

いてゝとも[illegible]

おとこにわすれてなげきけるころ百首
うちまつるる前栽の露をもとなるあて
なる

市深井門

もとつもとしおきのる露なのなるもとなるのうるはあり

光不知

さらぬもの身のまもあるあるの月のまもふるあるの
行流行よたりしかは清興行年恋上
ことをとるまもるるる

たちまつりけていひつかはす

宗巌法師

はかなくこそ見てもあるかはあまたにわかれてあさ夕の
たのみなきをいまはとはるけるまゝに行
のそみ霧のあかつきをまちてもあり

和泉式部

ぬれてこそあかしかねつれあさ露のおきてのちこそ
ほかなりたえまをいひつかはす

相模

あやめもそかりけるすゝめ人をいのちまつる
かりけり世代人なれいとをきてをいひつかはす

清原元輔

うきなすることをかは地のあまをとめ海人
ゝをとせのおとゝをいひつかはす

後子内親王 大臣

こゝろあまをうもさきはなるまてまつよかはけ
おとたにたちけりいとをいひつかはす

章行

すにまる

章行 章相女

たもひもきりけひ水のたゝ
ゝとおもはけ
(まつ名をいひつかはす

大僧正行尊

律師仁祐

うくひすはまつのえだにかたらひて
ねしわかるるよかなりけり

大僧正行尊

うくひすはいかにもなれしなれなれぬるをわかれと
とはばいかゞこたへん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今はかはらぬ世の中の
中納言通俊卿
みよしの山
赤染衛門 歌人
たれをかは
のこ
まつとはなしに
中納言通俊
ゆきの人
わすれぬ
ものを
和泉式部
いつかまた
人をみくまの
たのもしの
大江公資朝臣
ちかひてし
ものを

相模 年号作者義
ながれゐて
ものを思へば
さはの
ほたる
だに
わが
身より
あくがれいでぬ
ものとは

詞花和歌集卷第九

雜上

雜上

一所〳〵の名を四季のよそ時にて春の山のをもあり

源重之朝臣

ゆきかゝるかすみのそこはなれはのまもなかめしまにのこる雪

堀川院のときの百首の中に

春のよのつゝみもとをの花よりて

源俊頼朝臣

そまやまにやゝ三年まゐりあるまてきあ雨の名

はかりの百首の中にまつわけるとき

なみのてゝ松の二つえとなりて扇のかゝあまれ

樓塵るまてゆけるときこゝろをよめる

のかゆけるよはのあるゆゝ山ゆゝ雨の春雜

四道三年ありあみてゆふきしてつゝはの

平忠盛朝臣

なすのをもしみやもとをもとをもとをもあるあへをみそ

昨日ありて後けるさゝ山のもとしやく

まりけるにまもてまもてまもて後けるの

源俊頼朝臣

まのもとをもとをみのもとをもとをもとを

[illegible]

天台座主法心

[illegible]

天蔵主房

[illegible]

宇治前大政大臣花みまうでたまへりけるに

堀川右大臣

[illegible]

二条関白とうりんの御みまいとてまうでたまへる

小野の宮

[illegible]

入道摂政のもとにまうでていとみまくほしけれど

大納言道綱母

[illegible]

新院位におはしましける時

[illegible]

[illegible]

大納言師氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て連歌しるしてあけるものの
なかにてみまさのやくあるこの山ぢ
こえてやよいかけまくも
かつがれつるかなとこの尾
花桜門猪苗代成布
みなかたのこの
雪のあしたつるぬきにくるものを
新発田なおりしまつ
水原隆重朝臣
水原陽朝臣

ことをのまを給けるまゝ
大蔵丞行宗
なをいのこの門ぢ菅まをとくあいなをなをいくるを
ぜしらて
おもひ出もなくてやみやみ
律師海慶
文永實信法師
のかりもけるこゝ
なけるみまく
なをまをとくあいなをなをいくるを京大文顕師の所ゟ寄合之
水原日宗
月てあるなけるこゝ
月へなけれく

けれども

大中臣能宣朝臣

月こそは人の心なけれども
おのれとすみのぼりぬる
月のうへかな

小一条院

池水はやどれるつきをなぐるなり
さ京大夫顕仲卿家屏風
下臈はこえをうしなひてみやこの人
中にはなげやりもつかはなる
なり

おもひなしかはりをみるやまのつきもまたうらと

四条宮下野

月ごとにふるとはなけれ
ども
月見はまつ四年まつそうかはる
利尻伝おりまし可月あるはけ歌
なは一けてるてまつせはけ

太政大臣

をみのゆつるのひかりとそ
あらしのやはらけるとあり

良暹法

いるまちの月をとそみつる
秋の知

内大臣

雲

くもをなつかしみとおもふ月のかたちのとこしへにみゆる月

山月とは　原通詠

さびしさはあまのつりぶねのこぎかへるあ
月のかたぶくまでもいとをあり

平忠盛朝臣

ゆく人もあまたわかるるたちてやはらは月をみる
ぞしるらん

橋の義茂

さみだれの山のこずえのくもとなるまで月とすまつる
堀川院の御時中宮のゐるまゐりてあ
まのつりぶねのこぎかへるまつ月のこずえはたちのぼり
けるをみてぬしつかまつるようなりとうた

あるれなるよいひけまとあり　天納之公實

いつのなれまるはいつる月かたいるをのはまのせさるる
ぬれ石知

紀貫之

こゝろみるあれ月をとみてあれ秋やうてあるなる
月のあるはあるけ歌前大納之公任まうてさ
まれけるをとこゝろ侍りてあひけ世と
まちもてこうるはけれをつりけり

中務卿具平親王

うのくゆけるれ月ふくこの人をるにまとは
扇風のこよ山のをるのて月みるく人

たくとゝろあり

大江嘉言

かくゝ山のゆきとゝみるまでもはるかすみを月とみしけ
ふは哥合しけるとき

左京大夫顕綱

ちとせ経ぬるよねやしらきしらゝの月のあるゝ
山路のなかてはしけるに月のあるゝ
けふはまうてきたるひけ人のいとゝ
さしてゝ

山人のいとゝ思ひたてゝ
ゝとゝせの人のもとへ月のあきはあらひ

中原長国

つけ
月よゝもしてゝとゝはおもはゝ人のみせわ
山なるまきのわけゝる宋屋の師よあし
てゝもゝ地いひけるまきの月のみてゝ
山ゝのあけゝをみてゝ

藤賢

なゝゝはなひもあるひとみてゝ山のゝ月
京極前大政大臣哥合

大蔵卿匡房

あきゝ月のゝ夜もしらくゝ月のゝそのゝ
ゝゝ月のゝてゝもゝをみけ

あるじまもあるとあれはけるまつかへとあく
はけまてあく　師前四大臣
つゆとあれはるあはなるもの思ふ月をこそもりくる
　　こる松を
　　知
ゆく人てをはるとはなるもの思ふ月のなるらん
ゆくひとつゝむとあるはなるやもくあるを
とらみけれはるあく

和泉式部

よのなかのこゝろはかなくあるとおもひしをこそ
このひまゝ思へはこゝろ月者はあく
はかてはるかあるこれのくらん隨

はくいひはけるゆくへもしらあく
あはのくにはるもくんはのはまはのはまはのはまはの人のみくん
保昌よりはれてはけるはまの薄屋相長のもし
てはけまくあく

今昔物語ものいなすひはものもの思ふくなけ
菅原國房かひけるをもしまなりて
須磨の月のあはるはるはけるは何
かはいひはるはけれは母のみるそこ
りけく

みくんくれ

おもはれはけるはけまはみるはるはもはは須磨の月
はくはくはけまはは

待賢門院堀河

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菅原隆時朝臣の母にて侍りけるを
て弟長清つかはしけるを
けるに長清の弟隆宣あひぬとさして
かのめのもとへつかはしける

菅原長清

いつかはとたのめしかたのあきの月のうつるまに心
[illegible]

相模

なくてのみはるるよりはまつの人のあ
はおもひけるこころのうちを

大納言道信母

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和泉式部

ものおもふこころはいかにとみるからにいとゝ人もの
おもはるるかな

なるこゑはたゝにしかなくなるとていとゝ人もの
おもはるるかな

大納言

人の世をあはれとおもふこころのみてそ
世をしる

少輔よさのぶ

長元八年宮内大夫大臣の家の歌合のとき
よみはべりける

大弁

伊勢

ゆふ暮はいかにとかはいとはまし
ものおもふ身にはあけぬなりけり

或尼大納資業

[業 後年内]

住吉の社にまうでたりけるに松のもとに
ものいはまほしけるを人のとゝめけるを
なにはのあしのかりねにはあらねとも
とゝめしをしるしにてこそ
とよめりけるをきゝてはるかにみやこ
をいでてこゝにしもとゝまりにけ
る

周防内侍

冷泉院の御製

ものおもふ
けふのあやめ
草にかけるしもなれはかつ
ぬれぬ

冷泉院御製

うつのやまのうつのやまとをこえてこそ
ゆくとはしるけれ

おもとをうゑみてよめる

和泉式部

ありなしとこの山の雪をまつよりはいまのあるとをしるべかりけり

ほのぼのとあけゆくかたのしらくもを天の川とのみ見つるかな

後二条関白家歌合に

後拾遺

ひさかたの山のもとなる人なれやたれをたれとかはるとをしる

後二条関白家歌合に

ひとりのみ見てやすらはるるものなれば人のなげきにかかるなりけり

かすみ中よりいづるつきかげ

原仲正

みちのくにさとをうしなひてゆくかたをしらずなりにしあやめ草

おなじやまのかたらまくをしみてねをなくほとときすかな

覚盛法師

ほとときすなくこゑをきくとはなしにあやめのくさをねをのみぞなく

長恨歌

原道済

思ひねをかたらまくをしみてみまくにあやめ草をぬきてかへりぬ

ながめのあまの住とてのやどりにも武陵の桃をたづねてのもとまで

橘為仲朝臣

たづねゆくまつのはるかにみるからにまつのはるかにみるからにまつのはるかにみるからに

世をこめてゐけくろ[illegible]の[illegible]
てまつりけるをおほえけることをみてそ
書つけける　左京大夫顕綱

かりそめにてをのれとしをへぬるものむすめ
帥おほ内大臣の石をよばけるときにひとりみ
てやまひをなりてまう
こる間ゐ

[illegible]みやこのうちにあれをとしてもなきあ
堀川院のきこ百首奉てまつりけるよ
う　大納言師頼

[illegible]

大蔵卿匡房

[illegible]元年の四月ちかくなりぬる
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いたりてもてはやすこそいとかなしけれ

[illegible]

[illegible]

一つのうしはけ

なまくさのあるまゝにうゑみまいぬかひつゝ[illegible]

左京大夫顕綱

詞花和歌集第十

雜下

郭公をきゝて

[illegible]

あやめ草[illegible]

[illegible]

[illegible]

くらけくおれあるまてまかて用前書
ふしとをとまをけくをみ分けく
右近中将敬長
みつきのをまなわあるれうきはをさくなしとも
さくれものちくをみてをく
ちくをまをあんお用一所をまをとをあ男お
春をさくくきくをけくしをく
増長
相ををををむ荒をの正をを家のあわるまをや
をけををきをけてをまをけくをおくをれ用を

源氏元
ををををきをねをふくをををを一のををを
くくちををへをををたををれをけくををみた
まをけく
四条中宮
ををををおをををのををあををかををれ家男ををり
春をはをくを用ををを仮をけくををを分仮を
をを仮内裏
かくて八今ををかををををををををををををををを
八今ををのくを立ををををををををををををを
和泉式部

ゆきかへりしかはかりやはなのさくらはあれもちりくもはてにけり
大納言為教卿
なにはがたあしのかりねのあさぢふの
ひとよのゆめのはるのなごり
常光院殿御歌
ふるさとの春の夜の月みるやうにあるかなきかの心
ちかくなりぬるかたのくもかくれ
法橋清昭
みれはこの山のかすみもあらはれぬ
夜の嵐のはらはまてしをりけんとも心
のへたてくもりはてぬる
神祇伯顕仲

この世をたつまつのはるかにいくそたはあれはうるはみなまたに
やまひおもくなりはてけるこの宮のかくよみ
てとりもち
おほ月のまみをみるとおもふてのこの山宮をはしてこそんとも心
大江擬周防守
はるかにみてかくもりはてぬるかなみし
赤染衛門
いかなれはこの命をかきりてこそ月はたとへそのかの
やまひはなをこの命をかきりてこそ月はたとへそのかの
東の路をはしてはしらるへき人をとはれ物と
とこしなへにとはしてはしらるへき人をとはれ物と
りまはしてみてをれてをる

大僧正行尊

みもわすれ むかしの春を思ひいでずばいかにせましとかなしかりけり

そらにのみ月をながめてすごしてはいとせめてのなぐさめとなる

人の心をとどめてはいとせめてのなぐさめとなる

みやこ人

こしみをとむなすはいとせめてのなぐさめとなる

前右兵衛督

碁はしし

かりのおもてはいとせめてのなぐさめとなる

あかなくにこしむみをつもなのりそをはなれぬ

大原はをみをつもなのりそをはなれぬ

大江以言

良暹法師

おほ原やまをみ雪をなるこのわらみをけちるなくく

前右兵衛督

賢智法師

なるみのなるみはあまのうきはつかわ

叶集えらみ侍りしとき

大政大臣

ふるゆきはいかにかなしかりけるなる

周防内侍

かりそめにいとはいてしつけ

大蔵卿匡房

かりそめにいとはいてしつけ

世のもみぢはいかにかなしかりけるなる

法師よりてのち奥大夫頭俊の部にまて四度

をまく

ゆくかわ西へゆくるふむつさしよりとりさてけてちり

沙弥蓮寂

みち人

北面知

為とをつく人ふまとにをつくをとつかちけ道

藤原資宗常陸介よりけるときし大花前の

使としてやしくくせめけ道八御匠房よりひて

ゆけ道と遠はるまきりつてゆけ道てへひし。

つけ

大皇太后宮肥後

一くと山ゆくるれおまるを海辺花ゆるとをくを

下簾よくしら道て昭川殿の作よりけ

人のもとへおくるもみせとをなくてつう

けう

大中臣能宣朝臣

くるとてやとるるをもくるの対人をとをとの所けくを

白河院よりおつてまりけるとき所理大夫頼季

よりけてまきとをくるけるけ宣育とをく

下ゆくるのみのひしつけ

津守国基

雲のうつて月くるとをよさしかまるとくるを

ぬ

所理大夫頼季

ひくこ月くるとをかけ道を行高まつのをひしかくん

新院位おくるまりけるのをくをを

をて述懐の年よりまを位けるを白川院の

[illegible]

大納言殿

白川のなかれとたのむしるしをば
法皇院れ河百年幸まる

大蔵卿匡房

百とせをもちてさかりてさくらばな
むすのすさうしうかりけり

原郡国書

[illegible]
左京大夫顕時近臣なりけり郎
[illegible]

関白お大政大臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

むすみてたまりの水かくねうつしてまつけそうとまつ
所をの内大臣うつしもてまつりけるもとて河内と
のくらもく　　大江嘉言

思かもなかれかくれしるかなわかれ
三条太政大臣身まうてゝ婚姻をみてよ
みく　　お天仰と云任

つくとふくかなみるにそさきておほのみはなのよ
むをあはとれて紅ゆけく人よ朝のあ
かけつ　　知いひ一つそけく
そ　　増川右大臣
そ　　なくとなくてゆとみる

なのこ四月右大臣身まうけしたまう
　　藤原相如
なをなてみもあ（ゝ）はれまぬかもなけくを
摂河中宮かくれ給てはのまきてとのあ
ゆるまを作ける　　国雅法師
なもひのなすあうまる（ゝ）をみをなるる
一条摂政身まうけくるる
　　小ね義孝
ゆまくれ家けい西をなるをゝ日よおつなゆ
ものおもひよゆけくをのひて侍けをくも
　　侍賢門院安嘉

今はをはなれぬとこそあかなくにはなる
萬國よりとられてなげきていひつゝ
しけり　清原元輔

おひなりてうれぬるときいしくなりにけるとき
天暦の后のうせたまへりしをなげきて
后にてうせたまへりしをなげきて
をくりけり

けふをあきにはかぎりなるものとしるあるべきなる
ものを　みつね

かなしさはあきにはかぎりあるものをいかなる
むしのなきて服せしめてまつる

神祇伯顯仲

あさましやみなみなるかの神よりかゝるとも
大江匡衡朋輩

てをゝ　赤染衛門

こそはなるものなれとかはるまじきかの
左衛門大夫

左兵衛公行のうせたりしをなげ
きてまつりける

まつ行けり　新院御製

いつかはの人をまつらんかの神の
松泉院にまいりて
つくりもおくりまつる

なるのをなげきかなしみ世中を分さしてこころあるこころ
置まとまれる人のみ人くしに
なかれてこころ何をかなしけくらんやてなきけせをあまこ
人の四十九日に論經文をかきつかうり
今をまねてとこそあれなれいつの神分をうんとこ
まのまいりてはけ世のまつりをしてはな
ひいてう分まうりけまいりみけ
四条中宮
くれてもみをあけるこころ世のあなたをもとめさいつ
いたものを居る書一けてはけるる

みくしたち
なかの家をとゆつなくあるる神
くしてとこころ信一といなわよくもりてゆの
けるは神のゆあるよ社のゆもいたの信
まうる
なるほのおもてしてはとてなるけくんるのと
なる義のいつもはきらしけるきにけるよ
まうる
遥る四郎と
なるもいたもていあるとなるたるよもさてわとの
良明成仏のいとと

一ゆのみたてまつりて仏ようしゅうとかのてはをうつしうつし

信解品周流諸国五十餘年のことを

あくまでもたのもしきものとさとりてそなたしうしゅ

合利講の次ゆ顕密佛道のこころをくしよよま

でなりまゆみたり

同日お太政大臣

まことにまことのあとをあらはしたりこころをうつしかの

いそかはしこころあらはしてもみまゆくうつしてん

常在霊鷲山のこころもち

登蓮法師

世中人の心のうちにこそよろこびあるべきの日

八代集文世々源氏恐
可謹年所

永正七年小長庚
申八月

前兵部少輔藤原之
判

少輔傳年古今
授合

右近中將藤原朝
判

五月廿七

永仁改元ノ時初ヲ
上旬ニ假依明勅大
德寺殿北条貞時
東門寺惠

寛永廿二八十八石戸辛一校了